

演 題	覚えるケアから考えるケアへ
副 題	役割を意識した新人教育指導

フリガナ	カイゴロウジンホケンシセツ コウシュウケア・ホーム
施 設 名	介護老人保健施設 甲州ケア・ホーム
フリガナ	カイゴフクシシ カタダアヤコ
発表者(職名・氏名)	介護福祉士 片田 絢子
フリガナ	ヨンカイトシヨクシュエイチドウ
共同研究者	4階多職種一同

I. はじめに

今年度より新卒者を指導していたが、新人職員から「次に何をすればいいですか」という困惑した発言が聞かれたり、業務の流れを気にしたり、業務をこなすことに必死になっていることに気がついた。その中で、自分自身が新人の時も同様の不安や焦りを感じており、同じ悩みや不安を抱えながら新人職員が仕事をしていると感じた。

自らの指導を振り返る中で、老健や介護福祉士の役割を意識した新人教育によって、新人職員が覚えるケアから自ら考えるケアに変化し、発言や行動に変化が見えたので、ここに報告する。

II. 問題提起

新人職員が何をすべきか分からない、業務の流れを気にしたり、こなすことに必死になってしまっていたのはなぜか、と考えた。

III. 問題提起に対する原因追及

①老健・ケアホームの一員としての役割の理解ができていないために、「今自分が何をすべきなのか」ということが分からないのではないかと。

②一つひとつの“ケア”がどういう意味なのか、ケアの必要性は何なのかということを理解できていなかったのではないかと。

③「何のためにこのケアが必要なのか」「このケアが利用者の今後の生活においてなぜ必要なのか」という根拠を考えられずにケアしているのではないかと。

IV. 提起した問題に対するアプローチ

①老健の役割としては、在宅・病院・特養との中間施設として、介護を含めた多職種でリハビリを提供して在宅復帰に繋げていることを再度説明した。

②介護としての役割は、24時間、他職種以上に一番利用者の近くに寄り添っている存在として、関わりから得られた情報を多職種と共有し、それを基にケアの提供をしている。またそれがただケアを提供するのではなく、利用者の自立に向けた支援である、ということを経験した。

③利用者が在宅に帰る上での本人の生活スタイルに合わせた介助の方法であることや、数ある介助方法の中で「なぜこの人にはこのような介助方法が適しているのか」と根拠をしっかりと指導していった。

V. アプローチに対する結果

①リハビリスタッフが提供しているリハビリがどのような内容なのか、現在行っているリハビリの他に生活の中で行えるリハビリはないかと、本を読んだり、リハビリスタッフに自ら聞いたりしていった。

②「介護福祉士としての役割を意識したことで、自立支援の必要性を考えられるようになった」との発言がきかれ、利用者の生活のペースに合わせながら、身体機能の維持・向上としての立ち上がり訓練やトイレ動作時の立位保持等を行うようになった。

③「根拠を教えてください前に、まずは自分でも根拠を考えながら関わられるようになった」との言葉が聞かれた。

VI. 考察

①今の自分にはリハビリの知識が足りていないと考え、その知識の自己研鑽につながったと考えられる。老健の役割を意識したことで老健だからこその視点が広がり、さらに考えるケアが深まっていった。

②これまで業務優先になっていたが、利用者一人ひとりに必要な自立支援とは何かと考え、今後その人の生活に必要なとされるリハビリ等を、利用者の生活ペースで提供することができていった。

③一つひとつのケアには根拠が存在していることを理解し、自ら根拠を考え出した上で関わるようになった。まず新人職員に考えさせたあとにその考えに対するつけたしや、改めて正しい根拠を伝えることで、新人職員の考え+さらに新しい視点として視点の広がりにつながっていった。

VII. おわりに

実際、働きながら役割に対する理解が深まる部分があったが、理解できていなければ、それは“ケア”ではなく、ただの“業務”の一部になってしまう。役割の指導を最初のうちから行うことが“ケア”として私たちが利用者、家族の今後の生活に関わる一員として日々意識し、自ら考えて行動できるようになるために必要な指導であると実感した。

新人教育は新人職員を育てるだけでなく、指導者自身も指導することで役割を再認識し、新人職員とともに成長できる機会である。今後もさらに成長できるように、指導に励んでいきたい。